

定年を迎え、妻を東京の家に残したまま、富山の実家にいったん戻り、庭木剪定の技術を身に付け、冬場には庭木手入れの「出稼ぎ」で上京する、名付けて「リタイア人生再活性化プラン」を胸に抱き、富山県のシルバー人材センターの剪定班に入れてもらったのは二年前。しかし今夏、高さ一八〇cmの脚立ごと転倒、背骨を圧迫骨折してしまったことで、夢破れ、療養中の自宅ベッドの上から窓越しに、夕暮れのふるさとの山河を見つめる日々が二週間ほど続いた時だった、携帯電話が鳴ったのは。

大阪に住む次女からだった。彼女からのeメール連絡は年に何度かあるが、電話は珍しい。

それもなんだか声が弾んでいる。

「今、友達の結婚式で東京に来ているの。お父さん、知っていた？ ここのホテルはニューオータニと言って、富山県小矢部市のオータニ・ヨネタロウという人が建てたんだって。……小矢部市って、おばあちゃんの実家がある所じゃなかったっけ」

このところかかってくる電話は、ケガのお見舞いがほとんどだったので、驚いた。脚立転落事故は、救急車で高岡市の総合病院に運ばれたことから、地元新聞にベタ記事で載ったのだった。背骨一本を圧迫骨折した程度では記事にならないと思っていたのだが、それは東京人の感覚、地域密着型誌面づくりを掲げる地元新聞にとっては、大事なニュースのようで、読者の関心は高かった。「重症」との見出しが付いたこともあってか、知り合いの何人かから電話があった。「自

宅にいるの？ 入院しているのかと思った……」というのが一番多かったか。

娘の電話に話を戻そう。

「ホテルの人によると、大谷さんの生家が博物館になっていて小矢部市にあるんだって、お父さん、行ったことある？」

「大谷さんの博物館？……うーん、知らないけど」

「そのホテルの人は数年前に行ったと言っていた、敷地が1千坪もあるんだって。すごくない？」

「東京ならともかく、田舎だからねえ」

米太郎の生家が博物館になっていることは知らなかった。母が八年前に亡くなってから小矢部市にはほとんど行っていない。

娘は続けた。「二千坪の家ってどんな感じなのか、見てみたいな。あす大阪に戻るけど、北陸新幹線でお父さんの所に寄るよ」と。そして付け加えるように言った。「……そうそうお父さん、脚立から落ちたんだったよね、ケガ大丈夫なの？」

この言葉を最初に聞きたかった。

娘は北海道の大学を出て、大阪の乗馬クラブ所属の獣医をしている。コロナ禍でも馬相手の仕事は忙しく、富山には一泊しかできないとか。

ネットで調べたら大谷博物館の開館は七年前。私が住んでいる高岡市の家から車で二十分ほどの所にあるようだ。ホテルニューオータニを建てた大谷米太郎や、実業家の弟・竹次郎、そして竹次郎の養子・勇は三人とも小矢部市の名誉市民に選ばれている。米太郎は小矢部市庁舎建設の資金を出し、竹次郎と勇も、地元の小中学校などの建設資金を寄付するなど、地元に大きく貢献したからだ。

私の担当医は近所の買い物程度なら車を運転しても構わないと言うので、私の軽トラで娘を北陸新幹線・新高岡駅に迎えに行った。

大谷博物館（米太郎と竹次郎兄弟の生家資料館が適切な名称かも）を訪ねた。二度目の東京五輪の年なので、企画展『大谷米太郎氏と東京オリンピック一六四大会』を催していた。五十七年前の東京五輪に向け、米太郎が建てたホテルニユーオータニに関する展示だった。娘は昨日そのホテルにいただけに、「なんだから私のための企画展みたい」と興奮していた。

貧農の米太郎が明治四十四年、二十九歳で上京するにあたっては、三年間という条件を付けて母親の許可を得たことや、手持ちのお金はわずか二十銭だったこと、東京に着いた日の格安木賃宿（一泊十五銭）で、たまたま相部屋になった男たちの話を耳にしたことがきっかけで人夫となり、日銭を稼ぐことができるようになったこと。そして相撲部屋に入った（米太郎は体格が良く相撲が得意だった）もののケガで引退、その後酒屋を手掛けて得た資金で、念願の鉄鋼業界に進出—という人生ドラマは、ただただ驚きでしかなかった。

大谷博物館を出て、米太郎の寄付で建てられた小矢部市庁舎を見るため軽トラを走らせていたら、大谷中学校の近くを通った。東大の安田講堂やオックスフォード大学など世界の有名建築をコピーしたユニークな建物が田んぼの中にあった。この学校やその近くに建つ高さ一一八メートルの「クロスランドおやべ」は、大谷勇の資金で建てられたものだ。

「田んぼのあちこちに見える公共建築がみんな寄付で造られたなんて、すごいところだね」と娘。

身を立てて名を上げた富山人には郷里に対する報恩の心があるようで、旧富士銀行（現・みずほフィナンシャルグループ）を創立した安田善次郎も、東大・安田講堂を寄付するなど社会への還元に積極的に取り組んだ一人だ。

「大学時代に小樽に旅行したのだけど、JR小樽駅から海の方を見ていたら北

陸銀行小樽支店があつて、なぜ、こんな所に富山県の銀行があるのかと驚いたけど、歴史的に富山と北海道は深いつながりがあるみたいね。案内役の大学の先生によると、富山県からは明治時代に、たくさんの人が小樽近辺に移住してきたんだって。その中には北陸初の鉄道を敷設した人、その人は富山では有名な実業家だったらしいけど、彼も小樽近くに移住してきたと言っていた。どういうこと？

「うん？ ……その人、もしかしてオオヤとか言わなかった」

「忘れた。富山では有名な実業家らしく、トナミの人とか言っていた」

「オオヤ・シロベエ（大矢四郎兵衛）と言って、今のＪＲ城端線を敷設した鉄道会社の社長だった人だよ。我が家のご先祖でもあるの、知らなかった？ 鉄道事業に全財産を注ぎ込んで、一文無しになり北海道に渡ったの」

「えっ、ご先祖って」

「鉄道敷設は水害などで工事費が膨らみ、大変だったみたい。でも途中で止めるわけにも行かず、地元の発展のためにと最後は全財産を投じたそうさ。八年前に亡くなったおばあちゃんは子供の時、大矢四郎兵衛の銅像の除幕式に出たんだよ。富山の金持ち番付にも載っていた人なんだ。要はお金の使い道だね」

「……」

「おばあちゃんが、大矢さんの曾孫ひまじなので、あなたは来孫らいそんになるの。玄孫やしやんの次の世代のことね」

「……」

娘は何か考えごとでもしているように沈黙し、「うーん」と小さくつぶやき、「だからか……血なんだね。友達が私にスゴイね、どうしてそんなことを？ とか言うんだよね、私はただ当たり前のことをしたのだけど……。というのは昨年、コロナが大流行した時、国から特別定額給付金が出たでしょう、十万円。私、こ

のうち三万円をある教育支援関係の団体に寄付したの」

「そうなんだ」

「お姉ちゃんから電話がかかってきて、『あなたも協力しない？』って。お姉ちゃんは今十万円全額寄付したとか。……まあ、彼女の所は夫婦でお医者さんだからねえ」

「どうしてそんなに寄付を、と友達から何回聞かれたことか。説明を求められても自分でもよく分からなかったが、ご先祖の遺伝子だったんだ……ナットク」

何億円ともいう年収を得ていながら、それでも満足せず、「もつと」と言う人は多く、己の利益の最大化にばかり関心を持つ人が大半のご時世、うちの二人の娘たちは「奇特なヒト」に見えたかもしれない。

日本資本主義の父と言われる渋沢栄一が改めて見直され、新聞やテレビは、「新しい資本主義」とか、「分配」とか盛んに言っているけど、大谷にも注目（大リーグの彼だけでなく）の必要ありだ。—そんなことを娘と話していたら、軽トラは小矢部市の国道を抜け、高岡市に入っていた。

「右手の川の隣りに大きな生け垣が見えるでしょう」と、私が指さし「あそこで脚立から落ちたんだ」

娘は驚いたように視線をその方に向けた。

「お父さんは、お母さんがちつとも心配してくれないと言っていたけど、そうじゃないの。地元新聞が見出しに『重症』と書いたが、実際は自宅療養で済んだことでホッとしたのよ。脚立事故を聞いた時のお母さんは、おろおろして私に電話してきたんだもん。脚立から落ちて亡くなる人も多いらしいからね」

そして意味あり気にほほ笑んだ。「でもお父さん、大谷米太郎はケガで相撲取りを止めて新しい事業を始め、大成功したのだから、見習ってリカバリーし

てね。もちろん剪定以外でいいからさ……。お父さん、前から言っていたじゃない、"リタイア人生再活性化プラン"だって。応援しているよ、うちは起業系社会貢献の家系なんだから」。

(敬称略)